

# 学校生活の質チェックリスト (小学生版) の 妥当性と信頼性に関する検討

表 三貴・繪内 利啓\*・宮前 義和\*\*

(香川県発達障害者支援センター) (特別支援教育講座)\* (附属教育実践総合センター)\*\*

761-8057 高松市田村町1114番地 香川県発達障害者支援センター

\*. \*\*760-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学部

## Development of a Quality of School Life Scale for Children

Miki Omote, Toshihiro Enai and Yoshikazu Miyamae

*Kagawa Support Center for Persons with Developmental Disorders, 1114, Tamura-cho, Takamatsu 761-8057*

*\*\*\*Faculty of Education, Kagawa University, 1-1, Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522*

**要 旨** 本研究では、「学校生活の質」という概念を提唱し、学校生活の質チェックリスト (小学生版) を作成することを目的とした。研究Ⅰでは、学校生活の質チェックリストの項目を収集、選定して、信頼性の検討を行った。研究Ⅱでは、臨床的妥当性を検討した結果、学校生活の質チェックリストの一部において、支援を必要とする子どもを弁別できることが示された。最後に、学校生活の質チェックリストの活用について考察を行った。

**キーワード** 学校生活の質, 小学生, 学校適応, チェックリスト, 自尊感情

### 問題

近年、様々な場面で生活の質 (以下QOL) が問われるようになった。これまでQOLという概念は、特に医療や福祉の分野で重視されてきたが、今や医療や福祉の領域だけにとどまるものではなくなっている。WHOは、QOLを「個人が生活する文化や価値観のなかで、目標や期待、基準または関心に関連した自分自身の人生の状況に関する認識」と定義し、国際的に標準化された成人用質問紙WHOQOLを開発している。また、特定の疾病がある者を対象者としたQOL尺度は様々な疾病の分野で開発されている。しかし、成人や高齢者、特定の疾病のある人のQOLについて多くの研究があるにも関わらず、子どものQOLの研究は少な

い (柴田・松寄・根本・飯倉, 2003)。疾病に特化していない小児用のQOL質問紙としては、「児童版QOL評価票」(松田, 2000), 「生活の満足度 (QOL) 質問紙」(中村・兼松・遠藤・佐藤・宮本・野田・大西・今田・佐々木, 2002), 「小学生版QOL尺度」(柴田他, 2003) などが開発されている。しかし、子どもが回答するうえで、記述に時間がかかり回答する子どもへの負担が大きいことなどの課題が残されている。

また、現在、学校で課題としてあがってきている、不登校や学習意欲の低下、いじめといった問題や、発達障害がある子どもの不適応などへの教育臨床的な働きかけのためには、学校場面に関連した情報を必要とすることが多いが、上記のような小児のQOL尺度は、幅ひろい範

囲における項目を用いて全般的なQOLを扱っているため、そうした情報が必ずしも十分に含まれていない。学校生活の側面に重点を置いたものとしては、福盛・峰松・馬場園・一宮・永野・藤野・上園(2001)が大学生の学生生活(「QOSL」)の視点から学生像を包括的に把握するための学生生活チェックカタログを開発しているが、児童用のものはない。

そこで、本研究では、QOLのなかでも学校と関連する部分を「学校生活の質」という概念として提唱し、定義する。そして、学校生活の質について、児童が簡便に評定を行うことができ、教師や専門家が子どもの学校生活に対する主観的認知を容易に把握できる新たなチェックリストを作成し、作成したチェックリストの臨床的妥当性を検討することを目的とする。

## 研究 I

### 目的

QOLの研究において従来から共通に指摘されている事柄は、自己への認識である。例えば、中村他(2002)、柴田他(2003)では、QOL尺度の項目に自尊感情に関する項目が含まれており、福盛他(2001)は学生生活チェックカタログの項目として自己効力感に関する項目を含めている。また、粕谷・河村(2002)は欠席行動をとまなう学校生活不満足群と自尊感情の相関を明らかにしており、自尊感情は学校生活に大きく影響を及ぼしているということが考えられる。

平成17年の文部科学省初等中等教育局児童生徒課の「生徒指導上の諸問題の現状と文部科学省の施策」における不登校の調査によると、不登校が学校生活に起因するものの直接のきっかけは、友人関係をめぐる問題(いじめ、けんか等)、教師との関係をめぐる問題(教師の強い叱責、注意等)、学業の不振(成績の不振、授業がわからない、試験が嫌い等)があげられ、中でも友人関係をめぐる問題の割合が高くなっている。古市・玉木(1994)は、学校享受感測

定尺度を作成し、中学生に対して調査を行っており、クラスに「困ったときに助けてくれる友だち」や「自分の気持ちをよくわかってくれる友だち」がいることが、生徒に学校生活の楽しさをもたらす最も重要な要因であることを述べている。また、男子においては、信頼感や親和感をもてる教師がいるとき、学校生活が楽しく感じられることがあげられている。友人や教師との関係は学校生活にもっとも大きく影響するもののひとつであるといえる。

また、学校生活の質を考える上で、学校生活そのものや学校環境への認識も重要であると思われる。仮谷園・西(2003)は、「児童の学校・教室のイメージには、学校に対する児童の心理特性が確実に投影されている」と述べている。このようなことから、学校環境への認知が学校適応を知る手がかりとなり、多くの子どもが快適であると認識している環境について、マイナスの認識をもっている子どもに注目することは、意味のあることだと思われる。

以上を整理すると、学校生活の要素は、授業、学校行事、学校環境などを含む「生活と環境」、友人や教師との関係を指す「他者との関係」、自尊感情などの「自分について」という3つに大きく分けられる。

そこで、本研究では、学校生活の質を、「学校における、『生活と環境』、『他者との関係』、『自分について』の認識であり、学校生活が快適であるかどうかの基準となるもの」とし、研究 I では、上記の定義に基づいた小学生の学校生活の質を測定するための項目を収集・選定し、学校生活の質チェックリストを作成する。

### 方法

#### 1. 学校生活の質チェックリスト原案の作成

QOLや学校適応に関連した尺度を参考にし、「生活と環境」、「他者との関係」、「自分について」という3つの下位チェックリストから構成される学校生活の質チェックリスト原案を作成した。次に、学校生活の質チェックリスト原案について、各下位チェックリストに関する

項目が過不足なく含まれているかどうか、小学校4年生以上に理解できる表記になっているかどうか、小学校教師に予備調査を行った。予備調査の結果に基づき、40項目の学校生活の質チェックリスト原案を作成した。

## 2. 研究協力者

香川県内の公立小学校に通う、小学校4年生(男子28名, 女子29名), 5年生(男子36名, 女子25名), 6年生(男子25名, 女子16名), 計159名を研究協力者とした。

## 3. 調査時期

2006年6月に調査を実施した。

## 4. 調査方法

質問紙はクラスごとに配布され、教師が読みあげながら児童が回答するという形式がとられた。また、回答のしやすさから無記名とした。回答は、「ぜんぜんあてはまらない(1点)」、「あまりあてはまらない(2点)」、「少しあてはまる(3点)」、「よくあてはまる(4点)」の4件法で求めた。

## 結果と考察

記入に不備のあった回答を除外し、小学校4年生(男子22名, 女子24名), 5年生(男子35名, 女子25名), 6年生(男子24名, 女子15名), 計145名(男子81名, 女子64名)を分析の対象とした。

## 1. 「生活と環境」チェックリスト

「生活と環境」チェックリストの13項目について、主因子法による因子分析を行った。固有値を高い順に並べると、4.43, 1.33, 1.03であった。第1因子と第2因子の固有値の差は大きく、第1因子の固有値のみが突出していた。そこで、「生活と環境」チェックリストが単一の因子によって説明可能であると考えた。

次に、各項目ごとに修正尺度-項目間相関係数を算出し、相関係数の高い順に項目を並べた。そして、「生活と環境」チェックリスト原案作成時に考えた項目の種別が可能な限りくまなく含まれること及び学校現場で簡便に使用できるようにすることを踏まえて、最終的に6項目を選択した。選択した6項目について再度同様の因子分析を行ったところ、1因子性が確認された。寄与率は35.77%であり、Cronbachの $\alpha$ 係数は.76であった(Table 1)。

## 2. 「他者との関係」チェックリスト

「他者との関係」チェックリストの13項目について、主因子法による因子分析を行った。固有値1.00以上を基準とした場合、各因子の固有値を高い順に並べると、3.71, 2.39, 1.42, 1.01であった。「他者との関係」チェックリスト原案を作成するにあたっては、「教師との関係」、「友だちとの関係」という項目の種別を考えたことから因子数を2とした。

次に、主因子法バリマックス回転を用いて因子分析を行った。因子を特徴づける項目について因子負荷量が.40以上で、2つの因子に.40以上を示していないという基準を設け、基準に満

Table 1 「生活と環境」チェックリスト<sup>a)</sup>の内的整合性

項目	各項目と当該項目を除いた項目の合計点との相関係数
(10) いっしょうけんめいに授業をうけている。	.438
(11) 校舎は、気持ちよくすごせる建物だと思う。	.610
(14) 授業は楽しい。	.567
(16) 休み時間は楽しい。	.450
(20) 自分の組の教室は、すごしやすい場所だと思う。	.429
(25) 学校の行事(運動会や遠足など)は楽しい。	.536

a) 寄与率 35.77%  $\alpha = .76$

たない項目を削除した。さらに、より簡便なチェックリストを作成することを目的として、各因子から因子負荷量の高い順に3項目ずつを選択し、計6項目を「他者との関係」チェックリストの項目とした。6項目について、再度同様の因子分析を行った。6項目についてのCronbachの $\alpha$ 係数は.72であり、内的整合性の保たれたチェックリストであることが示された(Table 2)。

### 3. 「自分について」チェックリスト

「自分について」チェックリストの13項目について、主因子法による因子分析を行った。固有値を高い順に並べると、4.24, 1.48, 1.28, 1.06であった。第1因子と第2因子の固有値の差は大きく、第1因子の固有値のみが突出していた。そこで、「自分について」チェックリストが単一の因子によって説明可能であると考えた。

次に、各項目ごとに修正尺度-項目間相関係数を算出し、相関係数の高い順に項目を並べ

た。そして、「自分について」チェックリスト原案作成時に考えた項目の種別が可能な限りくまなく含まれること及び学校現場で簡便に使用できるようにすることを踏まえて、最終的に6項目を選択した。選択した6項目について再度同様の因子分析を行ったところ、1因子性が確認され寄与率は42.50%であり、Cronbachの $\alpha$ 係数は.81であった(Table 3)。

以上の3つのチェックリスト18項目を最終的な学校生活の質チェックリストとした。

### 4. 性差・学年差の検討

性差、学年差の有無を検討するために、性および学年を要因とした2要因の分散分析を行った(Table 4)。その結果、「生活と環境」チェックリストで学年差が有意傾向であった( $F(2, 139) = 2.49, p < .10$ )。戸ヶ崎・秋山・嶋田・坂野(1997)では、学校不適応感尺度の学業場面の因子において、学年を追うごとに不適応感が高くなる傾向がみられているが、本研究ではそうした結果は得られなかった。

Table 2 「他者との関係」チェックリストの因子分析の結果

項目	因子	
	I	II
I 教師との関係 ( $\alpha = .84$ )		
(30) 先生は、わたしのことを信じてくれている。	.849	.123
(32) 先生は、わたしの話をよく聞いてくれる。	.782	.063
(35) 先生は、わたしのことをよくわかってくれている。	.765	.053
II 友だちとの関係 ( $\alpha = .73$ )		
(38) 友だちといっしょにいると楽しい。	.085	.730
(1) なかのよい友だちがいる。	-.020	.729
(7) こまっているとき助けてくれる友だちがいる。	.148	.660
因子寄与率(%)	32.45	25.37
累積因子寄与率(%)	32.45	57.81

Table 3 「自分について」チェックリスト<sup>a)</sup>の内的整合性

項目	各項目と当該項目を除いた項目の合計点との相関係数
(8) 学校で元気にすごしている。	.419
(18) 自分の将来を楽しみにしている。	.660
(22) 自分のことを、けっこう気に入っている。	.612
(27) 夢や目標をもっている。	.622
(36) 目標にむかって努力している。	.617
(39) 友だちに自慢できることがある。	.468

a) 寄与率 42.50%  $\alpha = .81$



Table 4 チェックリストごとの性別・学年別の平均値と分散分析の結果

	4年		5年		6年		性差	学年差	交互作用
	男[22] <sup>a)</sup>	女[24]	男[35]	女[25]	男[24]	女[15]	F値	F値	F値
生活と環境	18.50 (3.1) <sup>b)</sup>	18.00 (4.3)	19.37 (3.3)	19.96 (2.3)	20.08 (3.3)	17.93 (2.5)	1.55 n.s.	2.49 +	2.05 n.s.
他者との関係 教師との関係	7.68 (2.1)	8.67 (2.0)	8.37 (2.0)	8.56 (2.0)	7.83 (2.7)	6.87 (1.7)	0.04 n.s.	3.18 *	2.16 n.s.
友だちとの関係	10.77 (1.4)	10.33 (2.3)	10.49 (1.7)	11.00 (1.2)	10.67 (1.6)	10.40 (1.8)	0.05 n.s.	0.24 n.s.	1.17 n.s.
自分について	18.95 (3.5)	17.50 (4.4)	18.09 (3.7)	18.96 (3.3)	17.46 (4.4)	14.53 (3.1)	3.22 +	5.49 **	3.02 +

n=145

a) [ ] 内は人数

\*\*p&lt;.01 \*p&lt;.05 +p&lt;.10

b) ( ) 内は標準偏差

「他者との関係」チェックリストでは、「友だちとの関係」で有意差は認められなかったが、「教師との関係」では、有意な学年差がみられた ( $F(2, 139) = 3.18, p < .05$ )。テューキーのHSD法による多重比較を行ったところ、6年生が5年生より得点が低かった。

「自分について」チェックリストでは、性の主効果 ( $F(1, 139) = 3.22, p < .10$ ) と交互作用 ( $F(2, 139) = 3.02, p < .10$ ) が有意傾向であり、学年の主効果 ( $F(2, 139) = 5.49, p < .01$ ) が有意であった。そこで、学年の主効果についてテューキーのHSD法による多重比較を行った。その結果、6年生の得点が4年生と5年生の得点よりも低かった。このことから、学年が上になるほど自分について否定的に考える傾向が推測される。柴田他 (2003), 中村他 (2002) においても、年齢が上がるにつれ自尊感情が低下し、女子よりも男子で得点が高くなる傾向がみられており、本研究と一致している。

## 5. 学校生活の質チェックリストについて

学校生活の質チェックリストは、QOL尺度や学校に関する様々な質問紙を参考に項目を作成した。そのため、含まれる項目は、学校に関する様々な質問紙の項目と内容的に重複するものが多くなっており、学校生活の質をチェックするために必要な項目を含んでいると考えられる。また、学校生活の質チェックリストは、現職の小学校教師による予備調査を経ている。すなわち、学校生活をとらえる上で適切であり、

小学校4年生以上に理解できる内容となっている。以上のことから学校生活の質チェックリストは一定の内容的妥当性を有していると思われる。学校生活の質チェックリストの信頼性については、各チェックリストの $\alpha$ 係数は、いずれも.70以上であり、内的整合性を有している。

従来の学校に関する質問紙と異なる点は、以下であると思われる。学校生活の質チェックリストには、ネガティブな項目が全く含まれていないため、子どもに回答することへの抵抗感を与えにくい。また、項目数も各チェックリスト6項目の計18項目であり、短時間で回答することが可能であるため、学校現場でも実施しやすい。さらに、項目を最小限にしながらも、子どもの状況を把握するために必要な項目を総合的に含んでいると考えられる。そのため学校現場でも十分活用することができるだろう。なお、最終的な学校生活の質チェックリストは、巻末に資料として記載した。

## 研究II

### 目的

研究Iで作成した学校生活の質チェックリストの臨床的妥当性を検討する。

## 方法

### 1. 研究協力者

医療機関により、高機能自閉性障害、アスペルガー障害、注意欠陥/多動性障害 (AD/HD)、学習障害 (LD) 等と診断され、香川大学教育学部特別支援教育講座SST教室に通っている、小学校4年生 (4名)、5年生 (3名)、6年生 (4名)、計11名 (すべて男子) を研究協力者 (臨床群) とした。また、研究 I の研究協力者の中から、性別と学年をマッチングさせた小学校4年生 (20名)、5年生 (15名)、6年生 (20名)、計55名 (すべて男子) を、乱数表を用いてランダムに抽出し、対照群とした。

### 2. 調査時期

2006年12月に調査を実施した。

### 3. 調査方法

研究 I で作成した学校生活の質チェックリストを用いた。第一著者が質問項目を読みあげ、それに合わせて児童に回答してもらった。その他は、研究 I と同様の方法で行った。回答は無記名で行った。回答は、「ぜんぜんあてはまらない (1点)」、「あまりあてはまらない (2点)」、「少しあてはまる (3点)」、「よくあてはまる (4点)」の4件法で求めた。

### 結果と考察

学校生活の質チェックリストの各チェックリストにおける項目得点及び合計得点について、臨床群と対照群とで違いが見られるかどうかを、t検定<sup>1)</sup>により比較し、結果をTable 5、Table 6にまとめた。

各項目について得点差をみると、「生活と環境」チェックリストでは、「(5) 校舎は、気持

Table 5 項目ごとにみた臨床群と対象群の得点の平均値と t 検定の結果

	臨床群 (N=11)	対象群 (N=55)	t 値
「生活と環境」チェックリスト			
(4) いっしょうけんめいに授業をうけている。	2.82 (1.0) <sup>a)</sup>	3.13 (0.7)	1.19
(5) 校舎は、気持ちよくすごせる建物だと思う。	2.18 (1.1)	3.04 (0.8)	2.50*
(6) 授業は楽しい。	2.64 (1.3)	2.75 (0.8)	0.27
(7) 休み時間は楽しい。	3.00 (1.2)	3.65 (0.7)	1.78
(9) 自分の組の教室は、すごしやすい場所だと思う。	2.45 (1.1)	3.24 (0.9)	2.56*
(11) 学校の行事 (運動会や遠足など) は楽しい。	3.27 (1.0)	3.53 (0.8)	0.89
「他者との関係」チェックリスト			
「教師との関係」			
(10) 先生は、わたしの話をよく聞いてくれる。	3.00 (0.6)	2.64 (0.9)	1.63
(13) 先生は、わたしのことを信じてくれている。	2.73 (1.0)	2.62 (0.9)	0.36
(15) 先生は、わたしのことをよくわかってくれている。	3.00 (0.8)	2.67 (0.9)	1.25
「友だちとの関係」			
(1) なかのよい友だちがいる。	3.36 (0.7)	3.73 (0.6)	1.82*
(2) こまっているとき助けてくれる友だちがいる。	2.64 (1.0)	3.24 (0.9)	2.05*
(17) 友だちといっしょにいと楽しい。	2.91 (1.2)	3.69 (0.6)	2.08*
「自分について」チェックリスト			
(3) 学校で元気にすごしている。	3.09 (1.0)	3.36 (0.8)	1.00
(8) 自分の将来を楽しみにしている。	2.27 (1.3)	3.36 (0.9)	2.56*
(12) 夢や目標をもっている。	2.64 (1.0)	3.31 (1.0)	2.03*
(14) 自分のことを、けっこう気に入っている。	2.45 (1.2)	2.53 (1.0)	0.21
(16) 目標にむかって努力している。	1.91 (0.8)	3.20 (0.9)	4.53**
(18) 友だちに自慢できることがある。	1.82 (0.9)	2.35 (1.1)	1.55

a) ( ) 内は標準偏差

\*\*p<.01 \*p<.05 +p<.10



「他者との関係」チェックリストの「教師との関係」において、臨床的妥当性が示されなかった要因としては、臨床群がある限定された集団であることが考えられる。すなわち、臨床群の子どもたちは、少なくとも平成18年4月から継続的な教育臨床的支援を受けてきており、学校生活が改善されてきている傾向がみられていた。また、「他者との関係」チェックリストに含まれる「教師との関係」において、有意差はみられなかったものの、対照群よりも臨床群の合計得点の方が高かった。このことから、臨床群の子どもたちが、学校で課題を有しているために、教師によってなんらかの支援を受けていることが伺える。子ども本人が課題を感じているにも関わらず、学校において適切な支援を受けていない子どもを通じて学校生活の質チェックリストの臨床的妥当性を検討した場合には、学校生活の質の低下が確認されることが予想される。

以上のように、学校生活の質チェックリストは、一部のチェックリスト及び項目において教育臨床的支援を必要とする子どもを弁別する機能を有することが示された。

## まとめと今後の課題

本研究では、研究Ⅰにおいて、学校生活の質という概念を提唱し、学校生活の中で子どもがどのような課題を感じているかをチェックする指標として、簡便に利用することのできる学校生活の質チェックリストを作成した。その結果、学校生活の質チェックリストは一定の妥当性と信頼性を有していると考えられた。研究Ⅱでは、研究Ⅰで作成した学校生活の質チェックリストの臨床的妥当性を検討した。その結果、学校生活の質チェックリストの一部において、教育臨床的支援を必要としている子どもを弁別する機能を有していることが示された。

学校生活の質チェックリストの活用については以下のようなことが考えられる。このチェックリストは、子ども自身が学校生活のどのような部分に課題を感じているかをチェックするこ

とに利用できるため、例えば、子どもに実施することで、学校生活において支援が必要となる可能性のある子どもをピックアップしたり、教師が気になる子どもに対して実施することで、支援計画のための情報として使用することができる。また、河村(1999)が、今日の学校現場では質問紙による調査があまり行われていないが、日頃の行動観察に加えて質問紙による調査を行うことで、子どもの理解をさらに深めることができる」と述べているように、自己評価による本チェックリストを用いて調査を行うことは、教師が把握しにくい部分を知る手がかりにもなる。さらに、昨今メディアで頻繁にとりあげられているいじめの問題は教師による把握が難しいとされている。学校生活の質チェックリストでは、いじめに関する項目を直接あげることなく、学校生活を快適と感じているかどうかにより焦点をあてて調査するため、いじめの有無を検出することはできない反面、子どもが回答しやすい。学校生活を快適と感じられていない要因として、「友だちとの関係」の得点が低い場合には、いじめなどの対人関係上のトラブルを推察することができると考えられる。

子どもへの支援を考えていく際に、家庭との連携は不可欠である。しかし、学校において、支援への取り掛かりの第一歩として、子どもの課題を見つけ、学校で対応できる部分へ働きかけていく際に、学校生活の質チェックリストは有用な情報を提供してくれると思われる。

今後は、研究Ⅱで臨床群となった研究協力者は男子のみであり限定された集団であったため、女子を含めた集団で臨床的妥当性の検討を行うこと、また、中学生に適応年令の幅を広げることなども検討していきたい。

- 1) t検定：分散が等質でない場合には、ウェルチの方法を用いた。

## 付記

本研究は、2005年度に香川大学大学院教育学研究科に提出した修士論文を加筆・修正したものである。調査に御協力をいただきました児童

の皆様、先生方に心より御礼申し上げます。

#### 引用文献

- 福盛英明・峰松修・馬場園明・一宮厚・永野純・藤野武彦・上園慶子 2001 大学生のQOLの研究：大学生用QOL質問票「大学生活チェックカタログ」の開発, CAMPUS HEALTH, 37 (2), 55-60.
- 古市裕一・玉木弘之 1994 学校生活の楽しさとその規定要因 岡山大学教育学部研究集録, 96, 105-113.
- 石隈利紀 1999 学校心理学 誠信書房.
- 仮谷園昭彦・西耕治 2003 児童の学校・教室イメージと学校適応との関連 鹿児島大学教育学部研究紀要 教育科学編, 54, 239-254.
- 河村茂雄 1999 生徒の援助ニーズを把握するための尺度の開発 (1) - 学校生活満足度尺度 (中学生用) の作成 - カウンセリング研究, 32, 274-282.
- 橘川真彦・高野玲子 2004 中学生における学校享受感に影響する要因 宇都宮大学教育学部紀要 第1部, 54, 21-33.
- 粕谷貴志・河村茂雄 2002 学校生活満足度尺度を用いた学校不適應感のアセスメントと介入の視点 カウンセリング研究, 35, 116-123.
- 松田宣子 2000 児童QOL評価の開発に関する研究：WHOQOL100 (成人版) に基づき作成した児童版評価を用いて 小児保健研究, 59 (2), 350-356.
- 中村伸枝・兼松百合子・遠藤巴子・佐藤浩一・宮本茂樹・野田弘昌・大西尚志・今田進・佐々木望 2002 小学校高学年から中学生の生活の満足度 (QOL) 質問紙の検討 小児保健研究, 61 (6), 806-813.
- 文部科学省初等中等教育局児童生徒課 2005 生徒指導上の諸問題の現状と文部科学省の施策について, 39-55.
- 柴田玲子・松崎くみ子・根元芳子・飯倉洋治 2003 学校におけるQOL調査からみた児童の側面 小児保健研究, 62 (2), 198-203.
- 戸ヶ崎素子・秋山香澄・嶋田洋徳・坂野雄二 1997 小学生用学校不適應感尺度開発の試み ヒューマンサイエンスリサーチ, 6, 207-220.

## 資料

### 学校生活の質チェックリスト

#### 教示

この調査は、あなたの日ごろの学校生活について答えてもらうものです。先生の説明をよく聞いてから、答えてください。成績とは何の関係もありませんので、思っていることを正直に答えてください。友だちと相談したり、まねをしたりしないで、あなたの考えで答えてください。

下に書いてあることがらは、あなたの学校での生活にどれくらいあてはまりますか？一番よくあてはまる数字を1つだけ選び、○をつけてください。あまり考えこまずに、最初にあなたが思ったように答えてください。

#### 項目

- (1) なかのよい友だちがいる。
- (2) こまっているとき助けてくれる友だちがいる。
- (3) 学校で元気にすごしている。
- (4) いっしょうけんめいに授業をうけている。
- (5) 校舎は、気持ちよくすごせる建物だと思う。
- (6) 授業は楽しい。
- (7) 休み時間は楽しい。
- (8) 自分の将来を楽しみにしている。
- (9) 自分の組の教室は、すごしやすい場所だと思う。
- (10) 先生は、わたしの話をよく聞いてくれる。
- (11) 学校の行事（運動会や遠足など）は楽しい。
- (12) 夢や目標をもっている。
- (13) 先生は、わたしのことを信じてくれている。
- (14) 自分のことを、けっこう気に入っている。
- (15) 先生は、わたしのことをよくわかってくれている。
- (16) 目標にむかって努力している。
- (17) 友だちといっしょにいると楽しい。
- (18) 友だちに自慢できることがある。